

最近のヒマラヤ登山の現況

尾形好雄（日本ヒマラヤ協会常務理事）

エベレスト初登頂50周年の節目を迎えた2003年は、世界最高峰に話題が集中した。中でも5月22日は新記録が相次いだ。三浦雄一郎が最高齢（70歳222日）登頂を記録すると、同日、年齢制限のないチベット側から15歳のネパール人・ミンキパが最年少記録を塗り替え、山村武史（22歳215日）は日本人最年少登頂を記録した。この日の登頂者数は南北両側合わせて110人を超え、1日の最多登頂者数となった。日本人の延べ登頂者数が100人目となったのもこの日である。また、シェルパのペンバ・ドルジェ（25）は12時間45分の最速登頂記録を作った。尤もこの最速記録は、4日後の26日にシェルパのラクパ・ゲル（36）が10時間56分で更新した。

それにしてもこの半世紀の進歩は著しい。人類初の足跡を印したE・ヒラリー卿も50年後にこのような記録ラッシュに見舞われるとは夢にも思わなかったであろう。

エベレストの登頂者数は1300人を超え、ヒマラヤで最も混雑する頂となった。そして驚くべきことはその登頂者の大半がシェルパなのである。彼らの登頂数の推移がエベレスト登山の変遷を物語っている。

1953年5月29日にテンジン・ノルゲイが初登頂してから2003年までの50年間で延べ600人以上のシェルパがエベレストに登頂している。年代別に見ると53年から65年の13年間のシェルパの登頂者は僅か5名。その後、3年8ヶ月のネパール・ヒマラヤ登山禁止があり、70年から第二次ヒマラヤ

ン・ブームが到来するが、それでも70年から79年までに登頂したシェルパは16名であった。中国領ヒマラヤがオープンされ北側からの登山も可能になった80年代になると49名と増えてくる。ところが90年から99年の10年間では323人と6倍以上に急増する。さらに2000年～03年の4年間では207人もシェルパが登頂している。

これは明らかに90年代に入って、商業公募隊をはじめとする大パーティが南北双方の通常ルートに殺到し、隊員に対するシェルパの比率を高め、強力なサポート態勢を取るようになったからである。

その昔、シェルパの役割は高所ポーターやコックでガイドではなかった。隊員のルート工作や荷上げをサポートするのがシェルパであり、決してサーブの前にでることはなかった。シェルパにルート工作を委ねるような登山隊は足元を見られた。

ところが今では登山許可取得からアプローチのマネジメント、ルート工作、荷上げ、キャンプ設営など遠征タクティクスの全てをシェルパが仕切って、キャラバンから頂上まで完全看護で面倒みてくれる。これでは高所遠足と言われても仕方がない。サーブとサーバントからガイドと客の関係になった。シェルパの優れた素質を見出し、彼らをヒマラヤへ連れ出したブルース将軍やA・M・ケラス博士らもよもやこのように主従が逆転するとは思わなかったであろう。

2003年日本隊のヒマラヤ登山一覧 (提供: 剝日本山岳協会)

山名	標高	季節	ルート	隊名	隊長	参加者	備考
1 サガルマータ	8848	N 春	南東稜	8 昭陽隊	山下道成		○ 5/22に通常ルートから谷川太郎(35), 長久保浩司(34), 吉田裕一(32), ヤマムラタケン(29), 広瀬健太(33)がシエラ/3名が登頂。
ローツェ	8516	N 春	西面	東京隊	山下道成		○ 5/10に通常ルートから谷川太郎(35), 広瀬健太(33), 長久保浩司(34), 吉田裕一(32), 中村和貞(29)がシエラ/3名が登頂。
2 サガルマータ	8848	N 春	南東稜	3 三洲エクスペディション	石井 謙		○ 5/22に通常ルートから三浦寛一郎(70)と兼本(94)の親子と村口徳行(47)がシエラ/6名が登頂。兼一郎は最高峰。村口は3度目の登頂。
3 サガルマータ	8848	N 春	西面	5 クラブ・エ・エティ	石井 謙		x
4 チョモランマ	8848	C 春	北稜	14 エイブ人	雨宮 篤		○ 5/20に大河内宗幸(25), 5/22田中基賢(54), 高島 聡(37), 泉田清幸(58)が登頂。
5 チョモランマ	8848	C 春	北稜	3 マウンテンゴリラ	安村 淳		○ 5/21に安村 淳(36), 荒木高英(53)が登頂。
6 チョモランマ	8848	C 春	北稜	4 九州マウンテンゴリラ	山下健夫		x
7 カンチンジュンガ	8568	N 春	北稜	1 アミカル	竹内洋吾		x
8 ローツェ	8516	N 春	西面		野口 健		x
9 ローツェ	8516	N 春	西面	5 JAC東海	田村 浩		x
10 ローツェ	8516	N 春	西面	1 ヒマヤン・エキスペディション	R. ラグリス		○ 9/27に登頂
11 チョー・オユー	8201	C 秋	西面	7 アーステスク	新田裕之		○ 9/27に登頂白井和義(59), 若藤謙吉(48), 田村俊彦(45), 芳田重彦(54), 倉田裕之(42)が登頂
12 チョー・オユー	8201	C 秋	西面	5 カラクルン	林 孝治		○ 9/21に林 孝治(51), 山下よし(53), 国枝宏子(63), 佐藤千重子(57)が登頂
13 チョー・オユー	8201	C 秋	西面	14 アドベンチャー・ガイズ	大藪 博		○ 9/21に佐々木麻正(48)と5名が登頂。9/28大藪博(52)と5名が登頂
14 チョー・オユー	8201	C 秋	西面	1 練馬山の会	河野千鶴子		○ 9/16に登頂。
15 チョー・オユー	8201	C 秋	西面	1 練馬山の会	河野千鶴子		x
16 チョー・オユー	8201	C 秋	西面	1 練馬山の会	河野千鶴子		x
17 アンガパルバット	8126	P 夏	西面		伊豆 大		x
18 アンガパルバット	8091	N 春	南稜	8 明治大学	結田 一郎		x
19 ガンサールI峰	8088	P 夏	北面	4 岩山	山本 隆		○ ポンテン・ルンから5/16に山本 隆(41), 高橋和之(30), 早川 毅(30), 森 周一(28), 天野和明(26)とシエラ/6名が登頂。
20 ガンサールII峰	8035	P 夏	南西稜	5 岩山	近藤和義		x
21 ガンサールII峰	8035	P 夏	南西稜	5 アドベンチャー・C	近藤和義		○ 8/1に橋本 飯保・上野・近藤とネパール人1名, HP1名が登頂。
22 シンヤボルム	8027	C 秋	北東稜	3 チーム石京	マイク・ロバート		x
23 シンヤボルム	8027	C 秋	北東稜	2 関西大	尾崎 隆		○ 9/26中央峰に登頂
24 シンヤボルム	8027	C 秋	北東稜	5 JAC東海	尾崎 隆		x
25 クンヤクセツユ	7852	P 夏	西面	5 同人ハバル	西田 治		x
26 バスー	7478	P 夏	東面	9 日本ヒマラヤ協会	森田和夫		x
27 ヒムジン	7140	N 秋	西面	4 ハービアン	野井国光		○ 8/18に東峰/6名が登頂。東峰1名がクレバスに転落して翌日救助して翌日救助もなしく死亡。
28 ツラチ峰	7059	N 春	南東稜	6 大塚山の会	野井国光		x
29 フンチ	7038	N 春	南東稜	4 大塚山の会	大西 保		x
30 フンチ	7027	P 夏	南東稜	5 大阪朝鮮会	城 隆嗣		○ 4/19に清が完治(60), 森田 正(53), 福岡カズオ(35)がシエラ/4名と共に初登頂。
31 スバルピーク	7027	P 夏	南東稜	4 栃木登山	中村正勝		x
32 スバルピーク	7027	P 夏	南東稜	4 栃木登山	森 初秀		○ 7/20に竹澤 片桐の2名が登頂。
33 スバルピーク	7027	P 夏	南東稜	4 栃木登山	藤 初秀		○ 7/20に竹澤 片桐の2名が登頂。
34 トルシェ・ラウバ	6966	N 春		8 Team Dorje Lhakpa Expedition	上田 幸男		○
35 アマダブラム	6812	N 秋		3 Team Dorje Lhakpa Expedition	西 治史		○
36 アマダブラム	6812	N 秋		3 Team Dorje Lhakpa Expedition	西 治史		○
37 カンダリ・シヤール	6811	N 秋		8 Khangri Shar Senior Expedition 2003	鈴木 昌己		○
38 ルオニイ峰	6805	C 秋		8 神戸大学	北口博教		x
39 メラ・ピーク	6476	N 秋		3 都立大学の会	熊中日出男		x
40 メラ・ピーク	6476	N 秋		3 都立大学の会	熊中日出男		x
41 メラ・ピーク	6476	N 秋		3 八王子おおりの会の会	林 孝治		○
42 メラ・ピーク	6476	N 秋		5 栃木県南	藤 初秀		○
43 チョラツェ	6440	N 秋		2 カラクルン	木内一成		x
44 チョラツェ	6440	N 秋		2 カラクルン	宮本 敬浩		x
45 ランゾウリ	6412	N 秋		2 札幌登攀クラブ	中川 博之		○ 4/26に単独登頂。
ヤブラヒマール	6035	N 秋		1 練馬山の会	河野千鶴子		○ 4/15に初登頂(単独)。
イムシャツェ	6160	N 秋		3 練馬山の会	河野千鶴子		○ 8/1に全員登頂。
イムシャツェ北東峰	6160	N 秋		3 練馬山の会	河野千鶴子		○ 8/1に全員登頂。
46 シャンステンラモ	6325	C 秋		7 カラクルン	林 孝治		x
47 ラックV	6190	P 夏		3 練馬山の会	大宮 求		x
48 イムジャツェ	6189	N 秋		4 イムジャツェ・エコー登山隊2003	宮川 高男		○ 9/28に登頂。
49 イムジャツェ	6189	N 秋		2 札幌登攀クラブ	中川 博之		○ 7/14に隊員3名が登頂。
50 キヤウリ	6024	N 秋		3 札幌登攀クラブ	若崎照幸		○ 9/25に隊員4名HP2名が登頂。同隊7/29にアルニコ・チュリにも登頂。
51 ヤマラン・カン	6005	N 夏		6 大塚山の会	大西 康		○ 7/12に12名が初登頂。
52 ハリワブチヤ	6017	N 秋		4 大塚山の会	大西 康		○
53 チャンガンチンサン峰	8008	C 秋		8 中高年未踏峰登山隊	伊東 亨		○

4. 海外登山記録

2003年の日本のヒマラヤ登山隊は53隊が33座を目指した（別表参照）。国別にみるとネパール26隊，中国17隊，パキスタン10隊。標高別では8000m峰25隊，7000m峰9隊，6000m峰24隊である。

03年も登山隊の半数が8000m峰を目指した。その内訳はサガルマータ（ネパール側エベレスト）3隊，チョモランマ（中国側エベレスト）3隊，ローツェ3隊，チョー・オユー7隊，シシャパンマ3隊，ガッシャーブルムⅡ峰2隊，カンチェンジュンガ，アンナプルナⅠ峰，ガッシャーブルムⅠ峰，ナンガ・パルバットが各1隊。エベレストとチョー・オユーだけで13隊も占めている。なりふり構わず8000m峰に立ちたいという登山者は後を絶たず，「ヒマラヤは高さが故に貴い」ようである。

2001年12月，ネパール政府は東部ネパールやムスタン地方を中心に新しく103座をオープンした。02年も13座が解禁され，さらに03年5月に50座が解禁された。これによってネパール・ヒマラヤは359座（ネパール山岳協会管轄の33座を含む）が登山隊に解放された。その昔，ネパールが3年8ヶ月の登山禁止措置を解いて再解禁された時（1969年）オープン・ピークは僅か38座であった。当時に比べれば，よりどりみどりの山選びが可能なのだから，視点を変えてもっと手垢のついていない不遇な山を目指してみても，と勧めたくなる。

国別ではインドへの日本隊が無かったというのは驚きである。

インド・ヒマラヤは，広大なインド亜大陸の北辺に連なる。東はミャンマー国境のアルナチャル・プラデシュ州から西はジャム&カシミール州までの広域にわたるため，モンスーン季でもモンスーンの影響を受けない山域を選ぶことができる。

また，アジアの大国インドでは，ヒマラヤの辺境地帯でもかなり奥地まで自動車道路が発達しており，アプローチに車が利用できる。ベース・キャンプまで長期間のキャラバンを強いられず，短期間の登山が可能だ。こうした地理的条件の良さから手近なヒマラヤとして一時は人気が高く，夏休みを利用して訪れる登山隊も多かった。

1979年秋にガンゴトリ・エリアのオープンが伝えられた時などは，満を持して待ち構えていた登山隊が怪峰シブリンをはじめガンゴトリ氷河周辺の峰々に陸続と押しかけた。因みに80年は20隊，174人の日本隊がインド・ヒマラヤを訪れた。

ところが83年にナンダ・デヴィ内院が入域禁止になり，これを境に登山隊は減少し始める。8000m峰は唯一カンチェンジュンガだけのインド・ヒマラヤにあって，ナンダ・デヴィはインド・ヒマラヤの目玉である。その垂涎のエリアがクローズされたのだからこの措置は痛かった。

尤もこれ以外にもインド・ヒマラヤへ行きにくくしている要因はある。その一つがインナー・ラインだ。北に中国を控えたインドにとって北部国境地帯をなすインド・ヒマラヤは，国防上重要な意味を持つ。インドでは国境線に沿ってその内側にインナー・ラインを設定し，外国人の立入りを制限してきた。インナー・ラインに抵触する山は，合同隊などの特例を除いて登山許可は難しく，山の選定には苦慮させられる。

また，ビザも登山の場合，インナー・ラインに近づくということで厄介なエントリー・ビザの取得が義務づけられており，面倒なことは確かだ。

然し，インナー・ラインの問題も近年では中印両国の関係改善により，国境寄りにシフトされ，ヒマチャル・プラデシュ州ではスピティ，キンナウル地域，ウッタランチャル州ではダルマ・ガン

が、ゴリ・ガンガ流域も開放されるようになった。東部のアルナチャル・プラデシュ州やシッキム、さらには東部カラコルムなど現在では一部制限付きながらもインド・ヒマラヤの殆んどのエリアが入域できるようになっている。門戸は開かれているのだからあとは登山者の情熱次第だ。

私の周りには東部カラコルムのサセル・カンリやシッキムのゼム・ギャップからのカンチェンジュンガに熱い想いを馳せた先輩たちがいた。憧れの山に登りたい一心で毎年毎年辛抱強く渉外活動を展開し、打診を続けた。「意思有るところに道

開ける」の諺の通りそれらは10年近い星霜を重ねて結実した。あのインド政府の堅固な門戸をこじ開けてきた労力を考えると今はほんとうによき時代と言える。これを活用しない手はない。創造次第で素晴らしい登山を实践できる条件が揃っている。インドは契約社会が成り立っており、合同登山もやり方次第では経済的な登山もできる。

クロード・コーガンがカシミールの盟主ヌンに初登頂して50年。自分たちの「創造するヒマラヤ登山」をインド・ヒマラヤで実践してみてもいいだろうか。